

熊野紀行

川井立齋記

寛政十年三月

熊野紀行

川井立齋記

熊野紀行

難波わたりに年頃すめる翁ありけり 世の海をわたるわさも物々しとて あらぬ
とてあらもくづのかきなじから 名をとくめんとにもあらず まいて人にも見せ
ず おのが心によかせつれど さるべきたよりもとめつらん 人もあなでいたつ
らかはしくて 身をわれかくとうらみむはてもなし されど世をすてん心もあら
ねぞ ゆく末の菩提をとらん思ひもなし 世を厭ふ心にや名を不[○]聞とぞいひける
何事にも聞あづからぬ心なるべし 去なからわが心に似たる友とらのたま[○]に
立ちよりきつゝ 波間に捨ふ玉ものうきが中にも心をなくさめ 花に[?]口葉にうと
き浦のとま屋におきふして あらぬ月日そかさねつ いつにかあらりけん 同じ
里にすめる信章といへる人のきていふやう 和歌のうらにひらふうきものみたり
かはしてけれど 増基法師とやらんそ 心のまゝにあらむと思ひて 世の中に
きつくときく所々をかしきを 尋ね[○]く心をやりたふとき 所々をよみ奉りて身
のつみをほろぼさんと いふめる將たいゝかにと思ひ給へるなど かたるに思ひ
かけぬ事なれど うらおとろかれてなで従う 心にこめつらんものといへばさ
れぞにやわがたのみたてまつれる 人の母の尼きみの 熊野に詣でんとあるにつ
きそひよかるなり そのやういはんまでにといはすれど はたさすかに思ひ出づ
る事なんあめり 翁の父もこのねぎなきにしもあらで 世をさり給へりし われ
もまたそのこゝろさしつきてと思まふれと所とて志げる 芦間のさはりうらにて

いまだはたし侍らで とし頃過ぎつかひなき海人のしわざも 海の波のたらし
げゝれば いかにせんといひさしぬ かの入又きたりてたのめつるかたにかく
かた里つけばさらのことなり 打つけにいひ出んも 何そは露のかたるべしとは
おもほえず ことかたのみいひもてわたりつされは その心にまかせてんやとそ
ゝのかすに われおもふに母のとし老ぬ 遠く遊ばんのをしへもいふにぞや心く
るし されど事せはしげに聞えさすれは とひみばやといはせてかへしぬ其のあ
らまし聞えあけ さすれば心よげにおほせごとあるになん たれかれもすゝめ物
しけれど いなみのにはあらしさのみは いはしろの野中の清水 その心もす
みゆくにいさしとて 心にはたゞしうものとりあつめなとして たひのてうども
おさゝしからず たゝ薬やうのものゝみとりもたせて出たつ頃そ 彌生中のこ
ろ八日といふに願とく かれこれいさなひつゝも難波のさとを出ぬ まづ佐よし
の社にぬさ奉りて

守ります神の心にまかせなん

海山とほき旅にはありとも

見おくり来れる人々あまた有つれば さかひの浦ちかくしばしやすらひて 別れ
のさかづきなどすめる 親よしのよめる

佐よしの神のみまハにわかれつゝ

はやとしかへりを松の下蔭

親よしの母なりける延樹尼かへし

たび衣袖のなごりの春霞

夏にかゝらば立かへりこん

かくいひかはすほどに 時(教)もうつりぬべきなと

す(住き)？さのものしいふめり

契りおくたひの日(教)かずはすぎぬとも

草の名とひそ住吉の濱

濱寺といふ松はらにて

うら近き松のこかげにみかへれそ

霞そなたそ故郷の空

信 章

其日は貝塚といふにやどる

十九日 みて川・鶴はらなどいふ村とすぐ 家居いとかかるさとびた里

立ちつゝく千世もふるやとみて行は

川邊にらかき鶴はらの里

みなとゝいふ所にふりたる松あり とへばひら松といふ

こゝにきてみなとの村のひら松は

しらでいく世の年かふりぬる

岡田村を過るとて

霞ゆく波路の末にほのみえて

あいとはるかに出るつり舟

おなじ心なしから

村郭相連垂井東 青松瀕海送春風

長陽随歩千帆出 阿淡遙分一重中

吹飯のうらにて

わかよはひふけいの浦に鳴たづの

音に立つれど世にも聞えす

廿日 夜をとめて田川の宿を立

池水にやどれる月の有明に

旅ねの床をおき出てしゆく

その日わか山にやどを定めふる さとに文つかはすおくに

見なれつる紀の遠山越えくれそ

そこと難波のうたもしられす

廿一日 吹上の濱を通わかのうらにて

故郷を跡にみつゝも春霞

立へたて行く和歌山^xのうら波

立かへり又も捨てむ和歌の浦の

よする波間のもくずなりとも

こゝろにおもふことを書きつゝ

わかのうらに捨て玉ものみかくれて

世にもしられぬ浪の下草

もしほ草かくてくらなんと

計りをうらみぞわしつる玉津島山

玉津島の宮居にぬかづきて

信章

延樹

信章

よゝの波かけて今しも頼(願)きぬ

みがくことばの至津しま山

春ふかく霞はうすき頃ながら

光をみする至津しま山

けふこしに和歌のうら波うけて猶

光をそふる至津島やま

奉納の心を

信章

延樹

波よする至津しまねに跡たれし

神の光そよゝにくもらぬ

道しある恵みを今もよるの波の

絶えせずいのる至津しまひめ

延樹

打よする波はかけても至津島

世に光りそふわかのうら風

同

輿の震とかいふは　むかし公任卿こゝにおはして　藝人ののりわしつりけん　し

るしにや　岩やに跡をとじめ置けんと　よみ給へるところにて　今は堂塔ありて

いとたふとけなり　亀の巖あり　それより舟にのりて　名草の山紀三井寺まうて

つ　金剛宝寺といひしか　今は紀三井寺護國寺といふ　むかしより本尊千手観音

はいましゝて　十一面観音八開山爲光上人の作なりとそ　山に三つ間法水あり

本の瀧と清浄水いひ　南を柳楊水といひ　北を吉祥水といふ　この三つの瀧ある

故に紀三井山と名つく　爲光上人は唐の僧にて　つねに観音を信じて　本願に称

徳帝の御宇にわたり給ひ 勝地をこゝに得てとゞまり給ふ 光仁帝宝龜年中に建
立あり 十一面觀音を安座す 左右天照・春日二神の像をおけり つたへていふ
神佛その面 人の見る事を□[?]り給はず ゆゑに前世をふるしといへども 厨子を
ひらくことをゆるさず 昔爲光上人この山に位給ふ時 龍女來りて水府にむかへ
奉る 三年三月にして歸り給ふ 梵鐘・錫杖・横道樹[△]（應同樹・ほら貝[?]）それ
四品をそへて奉る 俄にしてそのかね海畔に出たり 里人奇異の思をなし 引あ
けんとすれどもうこかす 爲光上人その時呪を持して 鐘を撫て給へば鐘は動き
出てなる 里人布を松にまとひ 龍頭に結びて引けるに かるどくとあかりて終
に寺楼にかゝる その松を布引の松と名づけて今にあり 鐘ハ乱世にいづかたへ
盗ゆきしにや今はなし 錫杖のミ残れり 横道樹は寺内にあり 花なくして実を
結ぶといふ 又龍女此山に來りし時 觀音乎龍燈を捧る事 退轉なりうるべしと
らかひせしとうや 今も七月九日龍燈を捧る事たえせずといふ かゝる縁起をき
ゝ侍れそ ことさらにたふとくニそ覺ゆれ

三井の名をこゝにもとめて紀の國や

たえぬ御法の跡ぞかしこき

はるどくと道引たまふらかひをも

頼む紀の路の三井の古寺

延 樹

こゝに來て御法をきけば世のつみも

名草の山の寺ぞたふとき

信 章

本堂奥の院をかみめぐりて けふは藤白の坂 王子の宮らかき所にやどる

躋攀藤白坂

宮古五^{跡?}林名

溪曲絲山隔

波高琴浦嶋

歌墳樹間没

玉島霧中明

自此木岡路

峻嶋似削成

廿二日

朝二立て藤白坂をこゆるに 藤の松にかゝりたるをみて

み坂なる松にかゝりし藤波は

所からかも色ことにして

雨そぼふるぬれゝて行くに 僧の一人宮原といふ所にかへるとてあひぬ 旅な
れぞ知らぬなからに ものいひなどして行つるまゝに 此らかきわたりに瀧あり
見せばやといはせつればともに行く いはかさなりふかくこまれる所にて寺あり
岩くら山といふ 瀧はたかき岩の上よりつたひて落つ その岩の引入りたる下に
道あるをつたひて行

流れての世にも聞えて何にかは

恨の瀧の名をのこすらん

かの僧の寺に立ちよりて 雨のをやむを待ほどにやがてはれたり されとおして
とゞめ□し給へは こよひはとてとゞまりぬ

たゝならぬ恵みの雨を思ふかな

こゝに道引紀路の古寺

和尚信章に一句のぞまれけれそ

春雨のめくみをこゝにしる日かな

化 龍

宿道村善國寺和尚見恵佳(佳)章同?回答添

宮原村外一番臺 何料因縁此遠来

旦喜衣珠照迷路 三山雲霧爲君開

廿三日 善國寺を立出るにかく聞ゆ

雨にぬれし衣もけさは立かへて

又も露そふ袖のなごりに

延 樹

絲鹿山にて

いとか山いとし難波もへたゝれば

心ほそくもけふは越ぬる

信 章

原谷といふ所に行つる 杜若のありければ

原谷のこかくれに咲ける杜若

五ツの里のへだてなるらん

この原谷たに五ヶ村あればにや (中)そこにやどりとりて 雨司の王子の峰にのぼる

魔所にてさるの時より人あらず (末)山もいとけはしく木立物ふり この葉ふかく

落つものを わけてやうゝに峰に至れば水穴・風穴とてあり 小石などうら

入れば 風いとう吹出 雨いたくふるとて里人おそれて近づかず 水穴に雨を祈

ればきはめてしるしありといふ

強上雨司王子峯 千年華表二株松

峰峰両窟祠前立 祈雨呼風人蕭恭

廿四日 原谷より出ゆく やがて野路にかゝる 雉子鳴ければ

子とおもふきじ可なく野を過行ば

猶故郷の母ぞ恋しき

信章

道成寺にまゐる きゝしより堂塔^{ミホトタ}嚴重にして いとたふとし

浦の蜚かづき上げてにし三佛は

誓の海の契りたのもし

縁起など聞きてさかを下りて はるゝ堤をゆき 日高川をわたりてやうゝし

て印南にとまる

廿五日 いはしろの松 古き木はかれて 近き頃小松をうゑたりと見ゆ

あとのみはよにいはしろの結び松

ふたゝび根ざす二木ながらに

浪の音を聞ばかりにて故郷を

恋しとたれもしはしろの松

延樹

日数ふる旅のころもの露けさを

見てやあはれといはしろの松

信章

印南より南部といふ所の浦つたひに濱ゆふいと多し

故郷を思ひかさぬれ熊野路の

名にしいなみの浦のはまゆふ

堺うらに漁舟のあまた浪にうかべるを見て

うら遠く海士の釣船こき出てゝ

いとまも浪に世をわたるらむ

信章

はや浦にて

山峰重こえてきの路の濱つたひ

日数すたらぬはやの浦松

そこに茶店ありいとさゝやかなる庵ながら きよらかに見えければ立よりて

芳養浦邊松樹深 日浮孤島夕陽沈

四州遙見波濤上 数点風帆慰客心

紀の海を見つゝ心もからはしく

やしなふうらの月雪のころ

延 樹

真帆引て漕行舟の数々に

見るめをそふる浦のうき島

信 章

あるじも心ありけれぞ ふるき跡などこなたかなたを しらべなどしてふるごと

をかたるに時うつりりぬ 其日は田邊といふにやどる 夜ふけてさとの夢をみる

ねさめする夜半ぞかひなき旅枕

又もみつかぬ故郷のゆめ

廿六日 朝とくたらて長尾といふにいたる これよりは山つゞきにて ふかくお山

のかたへのみ入ゆくなりけり 蟬のなくを

行春もしばしと思ふに夏をはや

松につけてやなく蟬のこゑ

汐見嶺へのぼるに鶯のなきければ

友なれやなく鶯の聲さへも

うきみ山路のなくさめにして

信 章

芝村といふにとまる この村は家ことに 里もじといふ柴を垣にして よそめいと奇麗なり

家つゞきかこふ柴垣しばくも

里の名とひていざやどりせん

家のまへにながれあり かづらをつたひて舟人わたる 山より柴人下るもおほし

夕日かげのこる外山の

岨道をとまなひつれてかへるしば人

扶杖青溪口 人家傍曲河

柴垣総繞迎 林岳自嵯峨

舟子捫蘿渡 樵童荷篠過

疲勞欲投宿 樹密夕陽多

曰くるればや宿のわらは 枕やうのものもていて、とかうものがたりす その
ついでにいふ このわたりより熊野まで いもがさをやめるものをいたくおそれ
て 妻子といふとも家の内におく事をいまひて 山の中に小屋をつくりてそこに
入(う)しむ 飲食^{足疾}をもはこぶにも竹などの末にゆひつけて かの小屋のまどよ
りさし入てあしとくかへる事にて侍れ ましてくすりもなければ そのやうもし
らず このかさわづらへば はたして死するとおもひて したきものだにもゆ
かずなりぬ 大口などいふけもの かのかさのか^香をよくきゝしりて来る 果して
かの大口の餌となるもの多し いたましき事とおぼさずや この家のわらはも

ちかきにこのかさやめりと見えてそのあとあり とひつれば いかにもさいつ頃
やめり されど五里ばかり上つかたに田邊といふ処に するべありてそのかたに
うつりぬてかものにして目立ぬ その後とみに家にもかへらず 熊野へ参詣し
てこりとりて後わが宿にかへり来ぬ かくする事所のならはしとなん まして順
禮道者などにも 此かさいできつるものあれば 一夜のやどりをかさずして そ
こ― おひやりつる なれどこま― いふ その母にとひたゞしぬれば いひし
に事たがはず侍れ たれ― もこのやうの事かたへ田舎には有ときゝしが はた
してこゝにありけりとつまはじきすめり やがて打なすほどに夢をみて

旅のうさを故郷人にかたりつる

夢もさめけり谷水の音

信 章

廿七日 十丈峠 あふさか峠などいふけはしき山坂をこえきて

くれて行春のなごりやみくまのゝ

杉の木のまに鶯のなく

藤の花いとおほく咲きかゝりたるに

谷川のながれはそこに聞えても

音せぬ藤の波そさわかぬ

けふはつかれぬれば 野中といふにやどりす

廿八日 夫婦坂・湯川・みこし峠などうちこえて本宮の坊につく

廿九日 本宮にもうでゝ

三熊野の神のいかきは越えぬれど

音なし川の水もにこらじ

延 樹

此神のめぐみを今もくみてしる

音無川の絶えぬなかれに

信 章

御社は二十餘り九年のまへに焼失して 今はかり宮にていとさうくし されど
坊より御供へなど奉れば かり殿のうらに入てはいし奉る

日をかさね山のいくへを紀の國や

あハれと思へ三熊野の神

延 樹

鳥居を出れば高橋とてあり 音なし川にわたしたり まへには新宮川あり 音無
・大峯・岩田の三の川落合処を巴の淵といふ そのかはを舟にて新宮の湊に下る
左右の景ハはんかたなし 名ある瀧石などかずくありて めくゝむるまもなし

巴水三川合 急流舟着校

山々機上錦 百里一時過

御舟島をはいして

山川のながれの末の御舟島

さして神世のあととぞおもふ

ほどなく新宮の濱につく 舟よりあがりてやどりをさだめて 新宮の社にまうづ
道のたよりよければとて まづ神倉山にのぼる いとさびたるところにて 山の
いたゞきに大なる岩を二つたゝみかさねて石の玉垣あり 拜殿を建ならべて宮居
はなし 南は海濱・新宮の城町など一目に見おろして 景色たとへんかたなし
欄干によりて人々眺め居たり されども魔所にてさるの時より人のぼらず いと

かうくし

松檜叢生石窟中

倚山建廟神倉宮

至尊蹤跡依然在

前□仍留上古風

人の世にうつりきぬれど忍ばるゝ

跡はありけり神くらの山

新宮にまうづ

鳥居より入はうらひらきたるところありて大門あり それより本

社やしろ（社）にさふらひて

おかみめくる 伊弉諾・伊弉冉尊みやしろのこまいぬ

のすがたいとめづらし あひむかひてふしたるさまなり ふるきたくみのしたり

けんか なべてのものとは見えす しさうなり

天くだるあとをみなとのゆふしおに

光さしそふ神のみつかき

くれかてにやどりにかへりに やかて枕とり出でたれど 浦波のおとはげしけれ

ば うらもねられず

草枕むすぶ一夜の夢さへも

波にくだくる三熊野のうら

三月昼のころを

暮のころ日数をしむ春ながら

いつかとよそにみくまのゝおく

なれてこし花の春にもわかれなげ

何をよすがに草まくらせん

延 樹

信 章

三十日 雨ふりぬべく見ゆれど出たらて徐福の墓を尋ぬ

昔年徐福入蓬莱 仙侶相携渡海来

一片山雲歸去後 荒碑墨々没莓苔

よゝふれともろこし人の名をとめし

昔の跡はきえずも有ける

信 章

古くたる木ども生しげりて石碑のみたてり まへうしろに小なる墓七つあり つ
きそひてもろこしより来れる人のはかなるよし (一里) さと人かたる いづれも田の中
にありて しるしの木しげれるまゝなり あはれに見やりて飛鳥社にまうづ い
と神さびたる宮居なり それよりみたらひ・三崎・うぐみなどいふ所々過つゝ
濱の宮居らかきほとりに 田鶴のたてるを見て

雨雲のはれまに見ゆる浦鶴は

濱の宮居に千代も住むらん

延 樹

八百日ゆく濱の宮居の松かげに

千代をかさぬる鶴の毛衣

信 章

濱の宮補陀落寺にまうづ 雨ふりきぬ たとりくゝて那智の山にのぼり坊につく
雨やうくやみて瀧みんとて出かく

雨にけふくるしき道もみくまのゝ

瀧見んためのわざにぞ有ける

八丁ばかり行けば観音堂あり瀧見堂とてつゞきたてり 雨はやみぬれども瀧のひ
びきいとすさまじ 頓阿法師の「たきつせのあたりの雨は はるゝまもなし」とい

ひけんもさる事にて

那智雄峯不易改

横岩削壁樹陰々

雲端迸落天河水

洗谷人問今古心

天川こゝに落くる末なれや

雲よりあまる瀧津しら波

雨雲に峯の木立はわかねども

空にまがはぬ瀧の白波

世に聞くはたゝあらましのひゞきにて

さらにおどろく三熊野の瀧

雨にそふいく川波を山風の

ひとつに落すみくまのゝ瀧

ふる雨に水かさまさりて那智の山

おちくる瀧は雲かとぞみる

雨雲に那智のを山はうつかれて

高根も見えずおつる瀧つせ

左右のうら松杉いとふかうしげれり

松杉のいくよふりけん苔らをも

たどる熊野のおくの山寺

本社観音堂にまゐりところゝをがみめぐりて 心のうちに思ふに むかしは人
心もすなほにして 神も託宣ありしにや待わびぬ いつかはこゝに紀の國やむろ

延 樹

信 章

の郡は遙かなれどもと　つくしなる子のおやにつけさせ給ひ　まてしばし恨みな
はてそ　君を守る心の程はゆく末をみよと　世に沈める人にしめし給ひし　後白
河院行幸三十二度の時御製御かへしかん神那枝なきにたくせん託宣させ給ふるに「しは
くしいかに忘れん君を守る　心くもらぬみくまのゝ月」との給はせける　かゝ
るふることも傳へきゝ侍れば　いとくありがたくおぼえて

謁熊野神廟

画壁青嶂峯入空

松杉陰翳一蹊通

宸遊此地餘踪迹

金榜高懸根本宮

大門揭敕筆額其銘曰

日本第一大靈驗所
根本熊野三所權現

熊野三宮属證誠

何人爲託觀音名

花山法主西巡浚

唱出扶桑第一聲

證誠殿名祭國常立尊

坊にかへりて年頃のねがひのかなへりしをとにもよろこびて　坊のわらはなどう
ちものかたらひ　かのわくはに山の事などとふにけふなん　あやしき事あり　川
里のものきたりていふ　御山に何げなきにけしからぬものおとす　そのかたを尋
ぬれば松の枝の折たるなりけり　朽ちたる枝にそあらずとつげぬ　かゝる事もし
有つれば　きはめて事あらんかなどかたる　その夜坊の中の人けはしう行かふさ
まなり　何そと問すれば　河内國なる順禮のもの十四人とか　高野より此山に詣
て　又いせにまうでつるとてきたる　けふは雨いたうふれぞ坊にやとるべしとい

へど 妙法山にまうで新宮へいでぬへしとおしていでつ 那智川をわたるとして
同行の少女ながれぬ かれすくはんとて つれなる男の川に入てわたらんとする
に 石にもや足ふみたがへけん 又ながれつ義といふものきつれば かしらつゝ
まへられてせんすべなく かつは石にうたれて命はたしぬ つれなる人立さわけ
どかひなし 少女ははやう所のものよりきて 引上つればつゝがなし 此事坊に
つげ来れるにこそといふ 思ふにかゝる旅路にて横死すれば かの浮屠氏の云ふ
前世の宿業ならんかとさく 人わなゝきぬ 明れば
朔日 雨やまず同坊にありて あだに日をくらさんといとほびなく おのゝ題を
とりうたよむ

朝霞

延樹

春にけさ霞める峯を分ワケくれは

立へだてつる谷の下道

信章

山のは端ハ山桜

山のは、長閑に霞む春ながら
日かげに消えぬ山の白雪

郭公

立齋

時鳥とのが五月の遠ければ

もらし初めつるけさの一聲

萩露

同

咲そへば枝おもけにも打たれていとし

露そふ秋萩の花

夕鹿

信章

淋しさをひとりそかこへ夕暮れに

とのへの鹿の聲きこゆるなる

松雪

同

時雨には□□見えし松のはも

けさ色かふるよはの白雪

逢恋

立齋

思えずもかはす夜床の手枕に

馴々しほとんうさをかたりて

別恋

延樹

ねやの戸を夜ふかく出るわかれ路

小つらき心の有明の月

山家

同

しづかなる山のおくにもうき事の

有としらるゝ柴のかり庵

述懐

ゆく末を思ふにも猶みくまのゝ瀧津

心にかけてしのばめ

更衣の月なれぞ

花すりのころも日かすとかさねきて

熊野のおくに夏立にけ里

二日 昼ころより雨すこし 晴ぬれば妙法山にまうでぬ

櫓つむ行手のみらもあはれなり

妙なる法のみ山とおもへは

三日 やゝはれたれそ 出立つに此頃 同じ里の尾(一尋)きみたちとゆきつれて 共に坊

にやどりしに けふは伊勢に赴くとて たらわかれぬるよし聞ふるに

くまの路に立わかるとも故郷に

はや帰り来て大伴の松

大雲取坂にて瀧をみかへりて

那智の山瀧もなごりやおもふらん

雨かげおほふ雨雲の袖

雨ふりぬべき雲出ぬれば

袖ぬれてこれこそわなれ雨もよふ

雲とり坂の木々のしづくに

うぐいすの谷にいと多く鳴くを

夏ながら谷の鶯聲すなり

みやこの春にわかれつらん

夕くれがた雨はれたり

四月杜鵑聲未聞 杜鵑花慶破烟雲

行人幾処尋泉憩 山影相逢夕日照

其夜は補のくぼといふにやどる

露の袖にしはしはやとれかりねする

枕の山の三日月のかけ

四日 朝小口川をわたる

藍輿辞客舎 朝見幾千峯

路轉泉声含 崖急苔色濃

気晴山霧落 葉密曙煙重

渡口呼舟子 指方向舊蹤

小雲取坂をこゆるに 卯花さかりにてせみも鳴

みくまのゝと^(きこ) かしきおくの山路には

あな卯の花と見つゝ過ぬる

山里はまたかへなくに蟬のはの

ころもきぬとや聲たてつ也

湯の峯にやどる こゝは出湯ありて 諸國よりの湯あむる人おほくきたる され

ど湯の峯にていとしめりがちなれば 一夜あかしかねつ あくれば

五日 みこし峠をこゆるに雨いたうふ里きぬ

山風にのみふかせ行雨の日は

かさの雫のかゝるわびしさ

枋川^{とよ}にてかじかの鳴を

谷せばみ岩間せかるゝ川水に

涼しさそへてかじかなくこゑ

夫婦坂をこゆるに雨せはしくふりきぬ (後き) すすなど夕立すとけゝしうさわぐ 狂歌

けんそなるめうと坂とてすすまじく

もの夕立やとらかけの音

夕ぐれ道いそくに郭公の聞こえければ

雨すさぶよはに螢のかけはあれと

星の光はみすの川波

八日 朝やうく晴間みえけれそ

三栖村畔雨初晴 日出雲飛山色生

觸石潺々溪水咽 穿蘿処々野鷄鳴

雨後至三栖川無橋因賦

離郷旬日紀南隅 前岳千山入描圖

一夜三栖風雲甚 前川渺々法窮途

けふは一日はれぬれど出やらで歌よむ

山新樹

旅人のわけゆくかたやまとふらん

春葉にしげる夏の深山路

田家早苗

けふはゝや門田のさなへときぬと

延樹

同

里卯花

とりくうゝる朝もにぎはし

立齋

夏ながらよそめもすべし卯の花の

雪にこまれる山陰のさと

初聞郭公

信章

かねてしも待しよころの時聞しのび

音なからこよひもらしつ

五月雨晴

同

此頃のかさなる雲もかきりありて

けふははれけ里五月雨の空

河夏月

立齋

夏川や涼しき波にやどるまも

ありとは見えすあくる月影

夏草露

延樹

朝露もわけ行袖にそぼらぬる

夏野の草のしげる此頃

野螢

埼女

水清き野川のながれしたひきて

草かくれゆく螢とふかげ

あまたありつれどもくしぬ

九日 三栖川に出でぬれど橋もなくまた舟もなし 里人の立ゐてわたすまみなり
東路の大井川などいひ出デつゝ おのゝかたにかゞまりつゝわたるものをかし
里はなれて鶴の松に巣くへるあり

松がえにひなもつ鶴の巣くふより

里もみすてふ名にやおふらん

田邊を過ぎはやうらにて

けふにはや浦づたいきてみくまのゝ

山ども雲におもひへだつる

南部の濱にて

旅衣かさぬ日数はいくへとも

思ふくまのゝ浦の濱ゆふ

みなへにやとる

十日 そこを出て

刈麦の田面にあさるあし田鶴を

それとみなへの里こへて行

千里の濱をみやりて

思ひやるけふも雨のふるさとを

とへば千里の濱の名もうし

人はし遠き千里のはま過て

かへる旅路といはしろの松

むすひ松のもとにきて

三熊野に又もきて見ん契りをも

結ぶ名ゆかし岩代の松

印南に野中の清水あれば

立よれどそれと計りにいなミ野の

野中の清水汲ひともなし

そこにやどりて

旅館宵闇絶世置 海風吹雨更蕭條

客魂空断山窓曉 獨向残燈夢又消

十一日 小松原を過かてに

村の名を聞にもたのめ小松原

さか行春をやどにまつ身そ

原谷にてやどる 暮れかけて雨ふりぬれと 雲おほく飛かふ

山川の岩まのみずに飛雲

わきて流るゝかげのすゞしさ

夏草のしげみかくれにゆく水の

ありとしらせて雲飛かふ

十二日 鹿の脊山をこゆるに 雨またふり出ぬ

たび衣かへるまでぬれ乎けり

鹿の脊山を雨にこゆとて

野中清水ハ岩代ニアル也

河瀬といふにつく

微雨肅々落日沈

蓬舟盪漿向江濤

啼鴉歸尽城山暮

巫女祠前樹色陰

十三日

雨はれぬべく見えけれど

津頭雨歇樹烟晴

朝霧消来海面清

湯浅人家連兩岸

山々翠色滿江肆

いとが山にかゝりて雨またしき里にふりつ

袖ぬれてけふこそはしれ山の名の

いとかゝ雨に旅のあはれを

かぶ坂にて

重登蕪阪鳥影稀

半嶺雲迷雨脚飛

幽洞溶々穿石徑

行人渡水轉沾衣

雨のはれま見えて袴さくかけをゆく

あめはれて日かけ嬉しにぬれし袖

かざすあふらの花の下道

かくいひつゝ蕪坂の嶺にいたれば 雨いとよくはれて 四方のけしきいとよし

こゝと白倉山ともいふ

茶店作

山路登々右角重

崑頭構店倚長松

二爲六島眸中折

南海觀潮在此峰

御所の芝といふのは 白河院熊野行幸の時 しばし御庵ありけるところにて 地
蔵堂のうしろよりのぼる こだかき山にこのあとを残せり 御所の芝ハ藤白也

晴昔行宮地 猶餘一面芝

眺臨多勝壁 落日帶山奇

藤白の御坂こゆれば海見え

夕日かゞやく淡路しま山

王子の宮らかきもとやとりしがりとひとひて一夜を明す 暁かた月をみて

月はや入佐の山しちかけれと

雲にわかるゝ明かたの空

十四日 うちはらを過るに 法師のびわをおひてゆく なにはわたりにすめつらし
けれ そ人に問するに山こえて かまとはらひとかやにゆくなりといふ

狂歌

琴の浦波のしらべは聞もせて

子に手を引れゆくひわ法師かな

??かな 脱字

ことの浦の松原をみやりて

春あらしことのうらわの松にふく

化龍

ふたゝひ玉津しまにまうでゝ

立かへり又にそみつれ玉津島

光をそへよわかのうら波

吹上にて

年をへしほどは根をしに顯はれぬ

いく波風か吹上の松

ありし日雨いたくふりぬれば 心の中におもひつゞける

今は世に聞えずともましまさは

雨をも風に吹上の神

ねんじ侍りしにほとなく雨はれたり かへりかてに宮ぬをたづね侍れと 里の人

もさだかにしらねば よそながらはいして過ぬるもいとほいなし 和歌山にやと
りて明ぬれば

十五日 粉川寺に心さして出つ

夾路長松十里程 紀川如帶練光清

可山相隔行將尽 曲座遙連虎伏城

粉川寺の観音は 靈驗ある御佛にて素意法師にも みらの洞の月を詠めよとしめ
し給ひけり 別堂なる僧にはおやのなかれにすまぬとぞ しれとさとりし給ひ
めしひたる子のおやには みるめはさらにをしからぬかなと つけさせ給へるな
ど 世々の勅撰にも見えたれば ことさらにたふとくをよみて

思ふそのこ川と聞は御佛の

ふかき恵みを猶たのまなん

弘法大師作阿字の佛体を拝み奉り 阿字を句の上におきて

仰ぎてもあふがざらめや阿字ときく

有かたけなるあとをのこして

志の山をこえて貝塚につく

わけ過し紀路の山々あとに見て

あすは難波のかたにかへらぬ

信章

あくれば十七日 ふるさとかへるべきを人々もいふゆり 雨ふりぬれぞ その
よそひしつゝ出たつ 堺のみなとに故郷の人々きて けふのかへりをまつといひ
けるに

故郷のたよりを聞は佐の江の岸に

生^{なま}そふまつのことかは

信章

はやう佐よしちかくなりて 雨をもやみければ

たのみおくねかひもみ^みつの山なれば

かへるを神や佐よしの松

佐よしにまうでゝ

かへり来るけふをまつにも佐の江や

馴し心は神むしろらん

延樹

かくてむかひの人もまたおほく聞え つれづれにもよろこびをいひて 佐よしの
濱より舟にのりて くれちかきほとにおのゝやとりにかへる

志ほれこし山分衣それさへも

なれし難波のうらなくやみん

信章

みくまのゝ浦のみるめはありなから

もらすのみこそかきあつめけれ

終

この熊野紀行は昭和十四年九月 大阪府立図書館所蔵の侍寫本を借りてうつしたものである。それには筆者の姓名も旅行した時の年号も書いていない。何だか物足りない氣がしたので いろ／＼調べて見たところ 同館の図書目録には川井立齊紀とある故 「大阪府人物誌」などをかりて見たがない。只河井立牧といふ歌人の事蹟を簡単に載せてあった。或はその縁故のものでないかと 帰里後「大日本人名辞書」を披いてみたら果して

河井立牧 歌人なり難波の人有賀長伯に学びて和歌を善くす 家集あり桂山集といふ 明和三年七月廿日没す 年五十九 男立齊 又歌をよくす
とあったので 河井立牧の子といふ事が明かとなった

これで大体いつ頃の人といふ見當がついたので 更に一步をすゝめて熊野旅行の年代をせんさくしてみた。そして本文本宮社参拝の記事中に「御社は二十餘り九年のまへに焼失して今はかり宮にて云々」とあるのに手がかりを得て調べてゆく。と 紀伊續風土記には「明和年中又々火災ありて社殿雜舎一字も残さず焼亡云々」とし 小野芳彦翁著熊野史の熊野年譜には「明和三年十二月十八日本宮社殿炎上」とあるので本宮社の焼失は 立齊の父立牧の没した年にあたる事も判った。それから廿九年後といへば 寛政七年（皇紀二千四百五十五年）の事となるから 河井立齊の熊野旅行は大体今から百四十余年前とみて間違ないであらう

本文殊にそのはじめの方に讀下しにくい点あるが すべて原文に従ひてたゞ誤字と氣付いたものは改めておいた

昭和十四年十一月

宇井龍水記

昭和十四年十一月宇井氏より借りて写す

芝口常楠

本紀行熊野詣は寛政十年三月なる等 同行者林信章の熊野詣紀行によりて明かとなる旨 宇井縫藏氏より通知あり

昭和十五年五月五日 芝口常楠

『熊野紀行』について

宇井・芝口両氏の後書き通り 寛政十年三月に林信章氏と川井立齋氏が同伴の熊野詣の記録なり。林信章氏はその時の記録を『熊野詣紀行』と題し絵入りで町並・宿・名所・旧蹟等詳しく記録しているのに対し この本は歌を中心にしたものである。又『熊野詣紀行』を最初に写本した影馴帝氏の後書きでは 川井立齋のことを川井不閑子先生の熊野詣へ同伴の林信章とあり 川井氏が林氏の歌の師匠らしく感じらる。

家の蔵書は父が手写したものでなく 芝口先生の手写したもので行書と草書の間ぐらいの書体である。和歌山県立図書館にも芝口先生の写本があると云う。先生は何部も写本して謹呈したのだろうか。

平成十七（二〇〇五）年七月二日

清水章博